

2009年1月22日
2:48

I トマス=アキナス(Thomas Aquinas: 1224?-1274)、その人と時代(つづき)

A 思想の概観: トマスによる Corpus Christianum (キリスト教世界) のとらえ直し

1 ア) 歴史という枠組み

ト) 存在論(オントロジー/形而上学)という枠組み

2 主要命題

a 「すべての存在は唯一者に向けて秩序付けられている。」 *ordinatio ad unum*

・ すべての事物を貫く神の意志(≒法則) → 「自然法」

b 「恩寵は自然を排除しないで、これを完成する。」 *Gratia non tolīt naturam, sed perficit.*

⇔ アウグスティヌス

まずトマスの主張に主要命題の一つは、全ての存在は唯一者に向けて秩序づけられているというものである。この唯一者は神を指す。要するに宇宙における全ての存在、全ての営み、また全ての事物は神を目標として、憧れとして秩序づけられているということである。この命題に関する含意がある。それはつまり、全ての事物の中には神の意志が法則化されて貫徹されているということが含意している。というのも、トマスに拠れば、秩序づけられているという以上は、全ての事物はある法則の下に置かれていることを意味していたからである。そしてここでいう法則は、トマスによると、これら全ての事物を作り上げた神の代わることのない意志に他ならないのである。その意志の中で人間の理性が把握できた範囲での神の意志というのが、トマスのいう自然法という概念になるのである。神の全宇宙をカバーする意志法則の内、人間の理性が切り取ることの出来た部分がトマスのいう自然法なのである。

トマスの考え方が見て取れる主要命題の二つ目は、恩寵は自然を排除しないで、これを完成するというものである。さて、自然というのはさっきいった宇宙にある全ての存在、営み、事物に置き換えられる。とすると、この命題で言おうとしているのは、神の恩寵、恵みというものは、宇宙にある存在、宇宙でなされている全営み、宇宙にある全ての事物と決して矛盾・対立するものではないんだということである。むしろ神の恵みというものは、この宇宙に存在する全ての事物をパーフェクトなものにしてくれるという話である。この命題でも含意するものはある。つまり、神の存在・意志を強く主張すればするほど、それだけ自然的な秩序の中に存在する事物全てが神の恩寵を受けることになる。神ということを強調すればするほど、この自然的な秩序に存在する全ての事物の固有の価値が明らかになるということだ。

アウグスティヌスの思想においては、神ということが強調される。そうなるとその分自然的な存在、この宇宙に存在する全ての事物はマイナスイメージで語られる。アウグスティヌスにあっては神の清らかさということとは、宇宙に存在するものの汚さをあぶり出すものだった。そういうものとして考えられていた。

トマスの思想は連続の思想である。神、そして現世。もちろんこの世はパーフェクトなものではなく、だいたい汚いものもある。けれども、トマスの世界においては神とこの世界は最終的には繋がっている。神様の恵みによって最終的には繋がるのだ。連続の思想がトマスの特徴付けている。これに対してアウグスティヌスの思想は断絶の思想である。神と世界を切り離す。神というものがますます強調されればされるほどこの世の薄汚さ暗さが浮かび上がってくる、断絶の思想であった。

そして13世紀になると、人々がアウグスティヌスのくびきを脱しようとした。そしてそういう機運に担がれる形で登場したのがトマスの思想である。こういったところに中世の夏という時代を映しているトマスの思想が見て取れるわけである。

トマスがアリストテレスを用いつつ、宇宙に存在するあらゆる事物を、神を目指す秩序体系の中に取り込もうとした。そして、政治という人間の営みもトマスの思想では今問題にしている秩序体系の中にしかるべき地位を占めることになる。その説明を行う。

II 人間・「社会」・支配

A トマスの人間観

1 「社会的および政治的動物」 *animal sociale et politicum* としての人間

← アリストテレスの影響

2 互いに友として善い行為 *bonum honestum* をなすために必要な社会

→ キリスト教的な価値観 (→ 事実と価値との接合という問題)

Ⅱ 人間・「社会」・支配

A トマスの人間観

- 1 「社会的および政治的動物」 animal sociale et politicum としての人間
← アリストテレスの影響
- 2 互いに友として善い行為 bonum honestum をなすために必要な社会
→ キリスト教的な価値観 (→ 事実と価値との接着という問題)

B 政治的リーダーを内包した「社会」

- ・ 政府の存在を「自然的」として理解

C トマスにおける支配・服従の問題

- 1 ふたつの支配服従関係
 - a 奴隷制的支配服従関係：墮落後から
 - b 家政的・政治的服従：墮落前から
 - ・ 共通善 bonum commune に向けて被支配者を善導する権力
⇔ アウグスティヌス
- 2 中世の国王観（人々を「善導」する君主）とトマス思想との親和性

まず最初に取り上げたいのは、政治という営みを行う主体、つまり人間だが、この人間というものをトマスがどう見ていたかということである。トマスの人間観。これを特に政治思想研究という観点から確認する。結論から言うと、トマスによると、人間というものはそもそも自然本性的に共同体、社会を形成する動物なのということだ。トマス自身が使っている言葉では「社会的および政治的動物」と書かれている。この点、アリストテレスの冒頭をまねしていることは明らかであるが、このアリストテレス政治学のまねを中世の聖職者が行ったことに重要な意味がある。つまり、人間が自然本性的に社会を形成する動物である、これを言い換えると、人間が罪を背負った存在だ、墮落した存在だということとは無関係に人間が社会を作るということを意味していたからだ。

けれども、同時に見落とせないのは、人間が社会を必要とするのは人間が互いに友として良い行為をなすためであると考えていたことである。要するにトマスは人間の共同体形成、社会形成に際しての愛という者の役割を重んじていた。そしてここには神に対する完全なる愛というものは必ず、隣人への愛が伴っているはずだといいかにもキリスト教的な価値観がトマスの中に息づいていることを物語っていた。

トマスは政治共同体、つまり国家であるとか社会の起源を動物としての人間が持つ社会性に国家ないし社会の起源を求めていた。罪とは無関係に、人間は放っておいても社会を作り出すということである。けれども、その社会性なるものをトマスは他方で、キリスト教的な価値と切り離しては考えようしないのである。そして、トマスの思想それ自体において、事実と価値というものが密接に結びつきあっていると指摘されるゆえんがこういうところにある。このことがトマス思想の最大の強みである。けれども同時にこのことがトマスの思想の最大の問題点でもあるのだ。

次に注目したい話は、そもそもトマスの考えている共同体が、政治的なリーダーとその活動を大前提として予めインプットされているということである。つまり、トマスにとっての人間の共同体というのは、その社会をきちんとリードする指導者がいないと崩壊してしまうものとしてイメージされていたのである。このことは言い換えると、支配という者を担当する政府の存在というものは社会そのものと同じく、人間にとって自然なものであるということである。

彼独特の支配服従をどう考えていたかを考える。

トマスにおいて支配服従関係は二通りあった。大地のものは奴隷制的な支配服従関係。これは支配者が被支配者を自分自身の利益のために利用する。こういう悲惨な支配服従関係は墮落の後に現れた。しかしもう一つ支配服従関係がこの世界には存在する。それは家政的・政治的な支配服従関係であって、支配者が被支配者を被支配者自身の利益、善のために支配するというもの。この家政的・政治的な支配服従関係というものは、共通善に向けて被支配者を導く、つまり善導する権力のあり方をトマスは提示していた。そしてこういう支配服従関係は人間が墮落する以前から存在したということだ。

トマス以前の中世政治思想をリードしてきたアウグスティヌスにあつては、そもそも支配服従関係が一括して墮落した人間の自己愛に基づくものだ、と否定的に捉えられていた。人間の罪というものがここでの支配服従の大本なので、支配服従関係は嘆かわしいものなのだとしていた。確かに奴隷制に見られるような支配服従関係は悲惨である。トマスもこれが罪に由来することを認めている。しかし、政治的な支配服従関係はほとんどトマスにおいては自由人相互の支配服従関係と目されている。是は肯定的に捉えるべきだと考えられている。なぜ政治的な支配服従関係だと結構なのか、それは支配者が服従するものを共通善に向けて

善導するからである。こういうところに、人間と人間の営みをネガティブに捉えていた中世全般、それと対比されるかのように人間と人間の営みの中に発展的なモメントを見だしていこうと考える中世盛期の違いがはっきり見て取れる。こういうトマス思想は端的に言って、キリスト教の教えにもかかわらず、存在し続ける支配服従という政治の現実を人々に正当化する機能を果たしていたのである。

そして中世の国王観とトマスとの親和性を示すことになる。12世紀ルネッサンス以降流布されるようになった君主観という文学ジャンルの一つの共通項が、キリスト教的な価値に向けて人々を善導する政治権力者の姿であった。こういう中世の典型的な君主観とトマス思想が親和性を持っているということがここからもういえるのだ。

このように、トマスにおいて、ポジティブな人間の見方、ポジティブな支配服従関係の見方が導き出された。こういったことを元にして、トマスはいよいよ国家を論じるわけである。ではトマスは国家をどう考えたのか。

Ⅲ トマスの国家観と教会

A 完全共同体 *communitas perfecta* としての国家

- ・ 根拠：現世的な目的を果たすのに必要な手段を全て備えている。

B 第一義的な完全共同体＝教会

- 1 教会≒永遠の幸福（来世的な目的）を得るための手段を準備
- 2 教会の権威＞国家の権力
 - a 世俗権力は教会のアシスト役
 - b 教会の求心力＞西欧社会の遠心力

トマスによると、国家・政治共同体は、完全な共同体という表現で規定された。国家とは完全な社会だ。どうして完全といえるのか。なぜなら国家というものは現世的な目標・目的を達成するために必要な手段を全て揃えている人間の組織であるからだ。つまり、完全という言葉を使っているが、これを言い換えると、自給自足できる。他の者の助けを必要としない。それがトマスの言うところの完全になるだろう。こういう考え方はまさにアリストテレスの政治学、共同体の見方をまねしている箇所である。このようにずいぶん国家を持ち上げた。

けれども、忘れてはいけない。トマスは聖職者である。聖職者トマスにとって第一義的な意味での完全共同体がもしあるとするならば、教会ということになるのだ。というのも、国家は現世的な目標を果たすのに必要な手段は確かに全て備えている。けれども、これに対してキリスト教会というのは来世的な目的、つまり永遠の幸福を得るのに必要な手段の全てを備えている。だからこそ、国家に比べてみてもキリスト教会を本当の意味での完全共同体だというのである。こういうところにかにも聖職者らしい考え方が見える。人間というのはこの世で欲望を充足させて生きるのが本来のあり方である。つまり人間という存在は永遠の幸福という超自然的な目的を目指すべきだし、目指しているのだとトマスは大前提にしているのである。こういう目的論的な人間とそういう人間の営みのとらえ方が、最終的には教会の権威が国家の権力よりも上に位置するのだという結論を導き出すことになった。要するにトマスにとって世俗権力は、人々が超自然的な目的、永遠の幸福という目的を達成するのを容易ならしめる働きを担うのである。つまり世俗権力は教会のアシスト役をあてがわれているのだ。こうして領域が広くて遠心力が多分に働いている西ヨーロッパ世界の全体をローマカトリック教会の権威が求心力を発揮してまとめる。そういう中世に典型的な世界の姿が、トマスによって説明され、正当化されたのである。正当化され、説明し尽くされた後のヨーロッパ世界は最終的には天上の世界、超自然的な世界と脈絡を保つことになる、カトリック教会という媒介を経て。こうして壮大な宇宙論というべきものがトマスによって確立された。次にトマス思想の評価を話す。